SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

文化変動の組織化(上)：『ひと』運動の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荻野, 達史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000409

文化変動の組織化（上）
—『ひと』運動の研究—

荻　野　達　史

目次

1．はじめに
2．理論的関心
3．歴史的背景と事例の位置づけ
4．『ひと』運動の概略
5．『ひと』の執筆者ネットワーク
5.1．刊行発起人たち
5.2．次世代の代表的執筆者たち
5.3．'90年代における回帰現象とその後
以上、（上）
6．『ひと』の読者ネットワーク
6.1．平均像の素描
6.2．ネットワーク生成の条件
7．総体としての『ひと』運動
8．結語
以上、（下）予定

1．はじめに

本稿は、1970年代から90年代後半まで継続されたある教育運動について、とくに二つの側面に注目した検討を行うものである。この運動は、雑誌を発行することをその中核的な活動とした、一種の啓蒙運動としての性質をもつ。また、各地でこの雑誌の読者ネットワークが形成され、読書会・学習会を中心とした活動が行われた。こうした対象に対して、第一に、この雑誌の編集および執筆に中心的に関わった人物たちの活動経緯と、彼らの間で形成されたネットワー

クとを記述する。第二に、読者ネットワークの規模・平均的な活動内容を素描するとともに、その生成・展開を可能にした歴史的・社会的条件について分析を行う。それでは、とくにこの事例を取り上げ、二つの側面に注視する意図はどこにあるのだろうか。まずその理論的関心から、次に事例に固有の文脈の点から、説明をしておきたい。

2．理論的関心

理論的には、社会運動と文化変動との関係を捉えることが、その関心の中心にある。このテーマは、社会運動研究の歴史でみれば、少なくとも1930年代以降、ときに注目を集め、ときに半ば忘れられ、そして再度注目されるといった浮沈を経ている。したがって、今日に至るまでの蓄積を整理し、より整合的な分析枠組みを形成する作業は、また稿を改めて取り組むべきだろう。比較的最近では、d'Anjou[1996]が、既にこの課題に取り組んでおり、かなり包括的な図式を提示した。この図式では、抗議キャンペーンから集合的定義(collective definitions)の構築に至る、影響関係のラインが主軸を形成している。ここでの集合的定義とは、「人々の社会的現実についての見方、あるいは周辺で生じた出来事についての見方」とされている(d'Anjou 1996：49)(1)。

ただし、図式の主要部分を構成しているのは、資源動員アプローチおよび政治過程アプローチで検討されてきた諸要因が、抗議キャンペーンの生起を通して、公的言説に影響を与えるまでのプロセスであるといえよう。この場合、公的言説とは、マス・メディアや議会、各種審議会、法廷などの、いわゆる公共アリーナにおける争点に関する諸定義、あるいはより動的に諸定義の競合過程である(2)。図式では、この公共言説から集合的定義に至る影響関係のラインも引かれてはいるが、この部分についてはあまり言及していない(3)。したがって、彼の図式は、より組織的で明示的な政治的過程を扱うことを目的に構成されたものと考えるのが妥当であろう。実際、彼が事例として扱っているのは、18世紀後半にイギリスで展開された奴隷制廃止運動である。

こうした理論枠組みに対して、かなり漠然とはしているが、社会運動と文化変動との関係について、また異なる着想を与える議論が存在する。Blumer[1939]以来の、非組織的なコミュニケーション過程で生じる、観念上の変化を重視する議論である。成員資格や内部的な階層構造を備えた組織を基盤とする社会運動に対して、その背景あるいは“前兆”を構成する、「人々の価値におけ

る漸次的で拡散的な変動」である文化的趨勢(cultural drift)に、より重要性を見いだしている立場といえよう。文化的趨勢の議論は、とくに人々が自己や自身の権利について抱く概念の変化に注目している。そして、この変化が、人々の自らの生活を省みるその見方に影響を与えると考えるわけである(Blumer 1939：256)。

この種の観点は、とくに70年代から80年代にかけてアメリカにおける運動研究を資源動員論が席巻すると、きわめて少数派に追いやられていた感がある。資源動員論は、より顕在的な抗議活動を展開するために、労働力、資金、情報・知識といった諸資源をより効率的に動員するための組織を、あるいはその組織化の条件を集中的に検討したアプローチである。そのため、“趨勢”といったアモルフな社会過程は、分析枠組みの中に、その居場所を確保することはなかった。

当時の傾向に対して反発を表明したのは、たとえばGusfield[1981]である。彼は、Blumerのいう文化的趨勢、あるいはそうした“観念上の変化”に基づく、ある変化を指向する（と観察される）諸活動の総体としての、一般的運動(general movements)に対して注意を喚起しようとする。ここでいう「諸活動」は、組織されておらず、リーダーシップやメンバーシップもないが、社会の諸局面で広範に生じている、葛藤含みな行為選択を指しているといえよう（Blumer 1939：256-7)。Gusfieldはこの議論を踏まえて、「運動」を社会的意味レベルでの変化としても定義できることを強調する。「運動とは結社の出現というよりは、むしろ事物や出来事についての意味における変化として考えられてきたのである」と。

確かに、このままでは、「運動」とは文化変動と同義になり、議論の上で混乱が生じる。ただし、Gusfieldのねらいは、こうした明瞭には捉えがたい漠然とした意味的変容を、組織的運動の発生条件として、あるいは狭義の政治的目標達成に限らずに、その社会的帰結の一つとして捉える必要性を改めて訴えることであったといえよう(Gusfield 1981：322-5)。例えば、組織的運動の起こす抗議活動自体が、ある社会的変化が生じていることを示すシンボルとして受け取られ、組織的にはなんら関係のない社会成員に対して、それまでとは異なる行為選択肢を開示することがありうる。同様に、ある種の行為選択の社会的受容性についての予期を変化させるるようなことも考えうる。つまり、拡散的に進行する意味的変動（文化変動）と組織的な運動との、循環的・再帰的関係性に注意を促すための議論であった(ibid 1981：326)。

こうした議論の指向性（あるいは嗜好性）は、理論的レベルにおいては、しばしば表明されることがある[4]。しかし、まさにその非組織性、拡散性ゆえの曖昧さ、捉え難さが主要な理由であろうが、経験的レベルでの研究は、あまり展開していないのが現状であろう。しかし、本稿は、この理論的関心を背景とした事例研究を試みたい。そのために、とくにここでは、Gusfieldのいう再帰的過程を、ある言説の生産と消費との循環的過程として、そして意味的変動を、その循環的過程によって加速される、当該言説の普及過程として、読み替えてみよう。

本稿で扱う教育運動は、既に述べたように、雑誌の発行を主たる活動内容とした運動であり、後述するように、編集委員や常連執筆者には、この雑誌に限らず多様な場で書き手・語り手として活動した人物が多い。彼らは、きわめて組織的に雑誌の編集・発行を行い、一定の言説に依拠したテクストを、大量に生産し続けた。もちろん、あらゆるテクストが、テクストの網の目の中から生じることを考えれば、彼／彼女たちの書く・語る行為をもって、単純に「生産」者と仮定することには慎重になるべきであろう。ただ、より多くの社会成員に読まれる可能性のあるメディアに書くという行為において、彼／彼女らは圧倒的にメッセージの送信側に身を置くことが多いということは確かであろう。

そして、この運動は、“読書会”に象徴されるように、まさに消費の場としての読者ネットワークを、各地に生み出していった。このネットワークは、一定の固定メンバーはいつつも、そのときどきの設定されるテーマによって、かなりメンバーに入れ替わりがあり、かなり流動的であった。その意味では、無組織的ではないが、かなり拡散的・非組織的な側面を持っている。その意味では、事後的にその消費形態を辿れる限界事例であるともいえる。それゆえ、あるテクストを消費しつつ、同時にある言説に依拠したテクストがさらに生産されうる受容的土壌を形成した、“アモルフな趨勢”を多少なりとも“明示的”に記述しうる可能性がある。こうした意味において、この事例は、理論的関心からみれば、きわめて適合的な性質を有しているといえよう。

さて、この教育運動を記述する、固有の意義については次節で説明しよう。

3．歴史的背景と事例の位置づけ

この教育運動が、とりわけ興味深い事例である歴史的事情が、二点ほど挙げられる。第一に、この運動は、日本社会における「教育・学校」問題について

の語り口が変化し、一定の方向で強化されていった時期と、ほぼ同時期に展開されたことである。簡略にいえば、「学校・教師」が、諸「問題」の原因として定義され、広い範囲で批判されるようになった時期と重なり、その内容においても、この種の語り口をもっとも純化した雑誌として認知されてきた。

また、この言説上の変化に対応する形で、それまでとは異なるタイプの教育運動が展開され始めたことは、しばしば指摘されるところである。歴史的事情の二点目は、この部分に関わる。通常、それ以前の教育運動とそれ以後の運動との関係は、異質性／不連続性において語られることが多い。ところが、本稿が扱う運動に関するかぎり、言説的にみても、組織的・人脈的にみてもきわめて連続性が高かったこと、そしてその連続性の基盤の上に、異質性を有した運動が分岐していったことが把握される(5)。

はじめの点について、もう少し説明を加えておこう。いわゆる「学校・教師バッシング」が「教育・学校問題」を語る基調として定型化したのは、1970年代であるというのは大方の認めるところである(6)。主には、メディア言説上の変化を捉えての指摘といえるが、60年代まで「教育問題」についての主要なフレームであった、「文部省VS日教組」という図式から、「学校内部の日常性」に“問題”が充満しているという図式への転換が、その変化の内容だ。それは、国家権力によって、教育行為の自由を抑圧される被害者としての「教師」イメージから、教室内で暴君として振る舞う加害者としての「教師」イメージへの変化に象徴されよう。

この変化について説明する議論も、既に幾つか存在する。例えば、各種「学校問題」に絡んで、「学校や教師の質的低下」を語ることが、70年代から80年代にかけていわば“常習”化した。その理由を、広田[1999]は、“批判的”家族の増大によって説明する。〈教育〉の内容を決める権限と責任は、地域でも学校でもなく「家庭」にあるとする観念は、大正期にはごく一部の中産階級家庭にみられたものにすぎなかった。が、とくに1960年代後半になって、そう考える親が、多数派を形成するようになった。これは、日本社会における経済的生活条件の底上げと、それによって可能となった高学歴層の増大に起因する。「教育する家族」の支配化仮説といえよう(広田1999：116-21)。

あるいは、不登校（登校拒否）現象の通時的検討から、〈学校〉から“聖性”が失われたことを指摘する議論もある(7)。学歴獲得（具体的には高校進学）が、経済的窮状から脱却する不可欠の手段として認識された時代から、その窮状が改善されたがために、その手段的価値を減じて認識されるようになったことが、

その理由となる。いわば、「ありがたみの喪失」仮説である。本稿は、こうした仮説を否定するものではない。しかし、こうしたいわば潜在的条件から、“自然発生”的に、学校や教師への原因帰属や権威をなからしめる言明が、実際のコミュニケーションとして発生・流通するとも考えない。

また、テレビや新聞といったマス・メディアが、いわば独創的に批判言説を生みだし、再生産し、もっぱらそれによって、「学校」や「教師」への眼差しが変化したとも考えがたい。例えば、70年代初頭から「学校批判」言説を牽引した代表格としてしばしば言及される、朝日新聞の長期連載『いま学校で』(72年10月～82年12月)がある。その担当記者・佐田智子が、きわめて興味深い文章を残している[(8)(9)]。それは、75年頃、数学者にして教育評論家であった遠山啓に、「落ちこぼれ」問題について長時間のインタビューを行ったときに、佐田が受けたショックを語ったものである。いささか長くなるが、本稿の事例に直接的に関わるので、一部引用しておこう(まず、遠山の語りから引用は入っている)。

> 「『いまの落ちこぼれ問題は、子供たちにはまったく責任がなく、具体的な責任は文部省や、他ならぬ個々の先生たちに帰せられなければならない“落ちこぼし”なのです。』…それまでの取材を通じて、実は私も、これはまさに“落ちこぼし”以外の何ものでもないと思っていた。が、当時は、教育行政批判はまだしも行われても、教師そのものに対する真正面からの批判を行うことには、マスコミ側には、まだかなり『ためらい』があった。『先生は子どもの味方だ』という普遍のテーゼが、社会にも、われわれの頭の中にもまだ根強く生きており、…当時すでに、教師が子どもに対する直接の加害者になっている事実にしばしばぶつかりながら、その事実をまだ真正面から取り上げられずにいた。…が、遠山さんは、そのことをいとも軽やかに、まったく気負うところもなく、サラリといわれた。それは、もはや自明の理で、疑う余地もないと。」(佐田 1980：184-5)

こうして朝日新聞紙上に、『いま学校で』の小見出しとして「落ちこぼし」というフレーズが8回に渡って使われた(75年11月)。そして、「教師」自体への批判が強められていくわけであるが、このフレーズを“開発”し、佐田にそうした記事を“書いてよいもの”にした遠山は、本稿が扱う教育運動の中心人物であった。72年に、教育雑誌『ひと』の刊行発起人を集め(翌年1月に創刊号がでる)、79年に亡くなった後も、長らく運動の精神的支柱としてありつづけたのが、他でもないこの遠山啓である。佐田も同じ文章内で、『ひと』やその他の著作を通して遠山を知り、インタビューを申し入れたわけである。

いかに自らが扱う運動とはいえ、その社会的影響力をさしたる根拠もなく過剰に見積もることは、当然できない。しかし、70年代以降の、学校・教師批判

言説の大量生産・大量消費を駆動したのは、階層構成の変化や全体的経済条件の変化といった、いわば潜在的構造条件だけではなく、また同時に、主要なマス・メディアの言説だけでもないということは、おそらく誰もが認めるところであろう。ある種の言説の普及には、より重層的な社会的過程が介在するはずであり、以下で検討していく事例は、まさにその組織的・半組織的営みを通して、ある種の言説を支配的なものとするのに一定の“寄与”をしたことは確かであろう。

4．『ひと』運動の概略

1973年1月16日、朝日新聞の家庭欄に、次のような記事が掲載された。見出しは、「みんなでつくる教育雑誌『ひと』」「戦後の教育問い直す　母と教師が対等に発言」とある。この月に創刊された『ひと』は、前年8月にこの雑誌のために設立された太郎次郎社から刊行されたのであるが、本文中で以下のように紹介されている。

「編集会議を公開にして誰でも編集に参加でき、読者が聞きたいことを書く、素人が作る雑誌」。

「（編集代表の）遠山さんは…『母親が子どもの教育の主人公として発言できるようにならなければ』…。『母親たちが子どもを交えて積極的にものをいう。これが積み重なれば、立派な教育運動、文化運動へと広がるのではないか』と語っている。」（括弧内引用者）

そして、創刊から半年たった73年6月、『ひと』は再び朝日新聞紙上で取り上げられる。「伸びる　家庭向け教育雑誌　受ける身近なテーマ」と題された記事は、総合雑誌、婦人雑誌が伸び悩む中、「家庭向け教育雑誌」は売れ行き好調であるとし、6種類の雑誌に言及している。そのなかで『ひと』は、「今年刊行されたばかり…『7～8千部売れれば、まずまず』という編集者の予想だったが、わずか数ヶ月でいまでは1万8千部。」と語られている。この出だし好調の様子が伝えられてから後、『ひと』が三度新聞紙上に現れるのは、80年代末（1989年7月25日　朝日新聞）である。

「遠山啓氏の意思継ぎ200号に」「素人の目で教育を見つめる」「子どもの立場でひずみを批判」と見出しが付けられた。89年現在、販売部数が約3万部になっているこの雑誌について、創刊時は「詰め込み教育が問題なっていた頃だった」が、「これまでの各号は、そのまま教育問題の所在を映し出す鏡になっているようだ。」と語られている。また、『ひと』の他の特色として、編集委員に元

読者の「素人」が多いこと、そして「授業記録」の掲載があることに言及している。

「53年3月号(63号)で登校拒否」を取り上げた時には、…「『学校に無理やり行かせるのはやめよう』という考え方を打ち出すなど、教える側の都合に支配された教育に常に批判を加えてきた。」

「(元読者の) 宮島さんが編集に関わり始めた15年前には、せっかく投稿してくれた大学教授の原稿を、『専門用語や難しい言葉が多い』という理由でボツにしたこともあったという」

「90年代を目前にして、編集スタッフは『今後もきちんとした批判を続け、こんな授業が望ましいといった代案を積極的に提起していきたい』と話している。…『わかる授業』の実践記録の紹介などを通じ、教わる側の視点で代案を示している。」

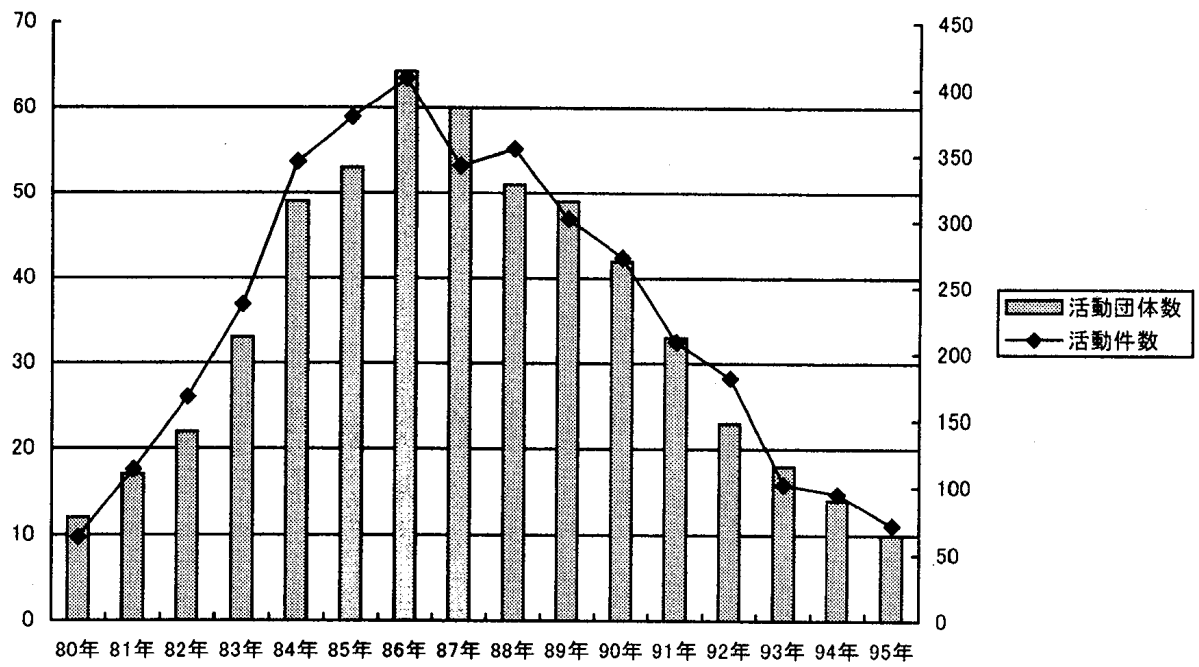
このように創刊から、一貫してある種の“批判的性格”をもつ雑誌として意味づけされた『ひと』は、98年3月に休刊するまで、25年間発行され続けた。休刊の理由は、必ずしも売り上げ減少によるものではなかったようだ。98年3月号の「休刊の辞」において、編集委員の教育学者・佐藤学は、一つの理由として「実践記録を中心に読まれていないこと」「実践の交流が中心にならない雑誌の無力」を挙げている。「事件的な問題を特集すると部数がはね上がる現状」に対して、「部数が少なくとも、日常の実践や活動を中心にしたネットワークを甦らせたい」という考えから、「このまま続けることも可能」ではあるが、「それよりも『仕切り直し』の方が大切だ」と判断したというわけだ。ここに現れているのは、この雑誌がもつ“啓蒙運動”としての性格の強さ、より正確には、編集に携わるものたちの間で、そう強く了解されていることである。

実際、遠山が73年の記事の中でも「教育運動」という言葉を使用しているように、この雑誌の発行は当初から、「運動」形成の意図のもとに語られた。「創刊の辞」で強調されるのは、「選別主義」あるいは“選別機関化した学校”の害悪（子どもの内面の分裂、親間、親―教師間の分裂などとされる）であり、その「害悪」を取り去り、「人間の全一性」と「人々の連帯」を回復するために、雑誌を創刊すると謳われる。そして、注意すべきは、この雑誌創刊・発行が、とくに戦後民間教育運動の反省において語られることである。73年から74年の誌上で、度々開かれた座談会を主に参照すると、その反省点とは、(1)個別の教科研究に限定されており、その総合がなされていないこと。(2)序列主義批判が不十分であったこと。(3)教師に限定されていた運動で、父母を巻き込んだ運動になっていないこと、この三点である[10]。本稿の文脈上重要なのは、第一と

第三の点、すなわち、個別教科研究に限定されていたとする「戦後民間教育運動」と『ひと』運動との連関性と、運動の層的拡大の成否である。

後者の点からいえば、層的拡大については、ある期間においては一定の成功を収めたといえる。グラフ1は、80年以降の『ひと』誌上から得られる情報に基づき、雑誌の読者ネットワークが各地で行っていた諸活動の件数を集計したものである。詳しくは後述するが、小中学校の子どもをもつ「母親」がそのネットワーク（小グループ）を構成する、主たる行為者カテゴリーである。雑誌の読書会、あるいは各種「教育問題」についての学習会を月一回程度の頻度で開いていたケースが多い。80年中期がピークで、60団体が年間で400件以上の活動をしていることが分かる。ただし、70年代中期以降にも、雑誌に、各地の小グループの活動が紹介されており、また当時の編集部代表への著者の行ったインタビューによれば、とくに70年代後半から、グループ数が各地で増加したという。

グラフ1　読者ネットワーク 年別活動件数と団体数



この小グループは、ただ自然発生的に各地で生じただけではなく、『ひと』の創刊当時から、編集部の組織化に対する一定の営みから生じたと考えるのが妥当であろう。『ひと』の大きな特徴として、「公開編集会議」を長期間行ったことが挙げられる。別稿でもこの点について触れているので詳述は避けるが、73年の創刊当初から91年まで、読者であれば参加自由の「編集会議」を各地で開

催してきた。74年以降、「日曜ひと塾」という講演会とセットで、まさに北は北海道から南は沖縄まで、編集部と編集委員が全国を巡ったのである。費用は編集部もちで、会場設営や観客動員は、現地の読者グループが行うという方法をとっているが、実際にはこの活動をきっかけとして恒常的なグループ活動が開始されるケースも多かったようだ。遠山などが誌上で語るところによれば、編集会議や「日曜ひと塾」で集まった女性たちに、定期的に例えば教科書についての勉強会や研究会をもってはどうかと勧めてきたという(『ひと』特集「市民運動としての教育運動」より)。

また、一例を挙げれば、山梨県のQ町(甲府から車で一時間の町)で、「Q町ひとの会」というグループが形成されたのは81年であるが、きっかけは「公開編集会議+日曜ひと塾」をQ町で開催したことである。甲府ですでに「甲府ひとの会」を組織していた人物から、女性の市民活動ネットワークを通して、Q町での開催が打診された。打診された当人は、『ひと』をさして知らなかったが、友人に長らく購読してきた女性がいた。東京で大学を卒業し、埼玉で中学教師をしてから、同郷者と結婚して生地に帰ってきたその女性は、まったく別の読書会で仲のよかった友人数人に呼びかけて、急遽「ひとの会」を作り、「編集会議+講演会」を組織した。そのときから、「Q町ひとの会」は、教育関連の読書会をするようになり、しばらくすると障害児教育をめぐって地元教育委員と対立することになる。これによって、地元では“少数派”の集まりとはなるが、その後、海外での救援ボランティア活動に参加したり、全国ネットの反原発運動に加わったり、90年代に同町で展開されたゴルフ場反対運動の中心になったりしている[11]。

70年代後期以降になると、こうした編集部・委員の介在なしに、読者ネットワークが各地で形成されるようになったと、当時の編集部代表者は語っている。いささか単純化していえば、編集関係者が自ら組織化のコストをかけて“モデル・ケース”を作り、そのモデルが誌上で紹介され、それが読者に“学習”されていく過程があったといえよう。同時に、上記の例のようなケースであるが、ある読者グループが、他のグループの組織化を促すようなこともあり、その限りで自生的なグループ形成がさらに促進されたといえる。80年代初頭から中期まで、誌上において、「○○市で『ひとの会』を作りたいと思います。関心のある方は連絡をください。」といった広報がなされ、実際に活動が開始されるケースも散見される。これなどは、“学習”による組織化の典型的なパターンである。

ここで確認しておきたいのは、雑誌の編集・発行に関わる者たちが、読者ネッ

トワークの形成を意識的に押し進めたこと、そして実際にネットワークが各地で形成されたこと、つまり、組織化された“言説消費者”が、この雑誌によって生み出され、かつそのことによって、当の雑誌は自らが受容＝消費される基盤を獲得していったという過程が、たしかに存在したことである。この、ある特定の雑誌に関して組織化された消費基盤の形成と存続は、ある種の教育言説が、当該メディア上で生産・再生産される強固な条件となることはもちろん、まさに“消費”の場で再生産される（語り直される）ことを含意する。

いわば“市井”において、ある種の傾向をもったコミュニケーションが生産されることは、コミュニケーション空間総体における占有率を測定しないまでも、特定の言説が普及していくことを意味する。このことはさらに、初期の読者ネットワーク活動が、後続するネットワーク活動によって認知・学習されるシンボル機能を果たしたと同様に、その周辺における社会成員に対して、ある種の言説を許容する空間が、“身近に”存在することを認知させる。あるいはまた、こうしたコミュニケーション上の“土壌”が形成されることは、類似的な言説を提示する他のメディアあるいはテクストが、許容・受容される可能性を高めることにもなり、やはりその普及に大きく貢献する可能性は高いと考えられる。

さて、こうした一種の言説普及モデルについて拘るのは、事例の性質に関わるからである。『ひと』は、既に述べたように、戦後の民間教育運動と関係がある。この運動は、歴史はあるものの、「反省点」にあったように、あくまでも「教師」の運動であった。つまり、もっぱらその範囲で生産・消費されてきた言説が、『ひと』という雑誌の創刊によって、その外部へと流出する回路が開かれた。そう仮説的に考えられる。また、『ひと』を25年に渡って読んでみるとすぐに分かることであるが、通常「民間教育運動」の流れに帰属・還元されることはないが、80年代中期以降の教育言説のある部分を強力に生産した人物たちが、書き手としてそれ以前から登場している。つまり、戦後民間教育運動の流れの中から、それとはやや異なる系統に分岐していく、次世代の主要な“語り手”たちを輩出した雑誌として、『ひと』を考えることは十分に可能である。後で取り上げることになるが、その代表格として、たとえば奥地圭子、あるいは鳥山敏子が挙げられよう。

著者が他の教育運動に関わる女性にインタビュー調査をしたおり、『ひと』についても話をむけたところ、彼女が「『教組』的な人が多い雑誌」と表現した。この「教祖的」人物が多い、というのは『ひと』を形容する言葉としてきわめ

て適切であるかもしれない。創刊時から79年に亡くなるまで編集代表者であった遠山啓もまた、「私にとっての親鸞」と表現されるように、読者のある層にとっては、やはり教祖的存在であった[12]。彼らの“実践”は、少なくともその形態においてはかなり異なるものである。しかし、あるコードにおいては、ほぼ一致する。それは、「圧殺するものとしての学校」というコードである。

70年代中期以降、一見どこにでも見いだされるコードではあるが、この言説を、おそらくもっとも純粋にかつ強力に産出し、流布させた人物たちが、まさに『ひと』を拠点に健筆を揮ったのである。『ひと』に中心的にかかわった人々の通時的・共時的ネットワークを検討することで、日本社会で一時期から支配的になった言説が、どのような系図の中で生産されてきたのか、その一端を明らかにできよう。これが次節の課題である。さらに、その次の節で、そうした人物たちの言説を消費する組織的基盤が、どのような社会的背景の中で可能であったのかを検討することで、ある言説が普及し支配的になっていった条件を照射してみよう。

5．『ひと』の執筆者ネットワーク

5.1.刊行発起人たち

そもそも教育雑誌を刊行しようという話は、1970年6月、故宗像誠也の告別式のあと、後の刊行発起人になる遠山啓、白井春男、石田宇三郎、そして編集部代表で発行人の浅川満が集まったことから始まる。ここで、遠山から「母親が子どもの教育の主人公として発言するような新しい雑誌が生まれなければいかんよ」という希望が語られたという（『ひと』73年2月号「あとがき」より）。はからずもきっかけを用意することになった故宗像誠也についても触れておこう。まさに彼の告別式の後であることには、一定の含意があるように思われる。

1908年東京に生まれ、教育学者（教育行政学）として1949年の教育学部創設時から東京大学の教授となった宗像は、戦前の教育科学研究会に参加して以来、教育運動とは関わりが深かった[13]。51年から日教組の全国教研集会で講師を務め、家永教科書裁判では日教組講師団の中核メンバーとして証人に立つなど、支援活動を行っている。また、戦前、綴方運動で投獄され戦後は著名な教育評論家となった国分一太郎と共に、勤評闘争に絡んだ裁判の弁護側証人記録を編集している。61年に出版された『岩波講座　現代教育学3』で、「教育運動」の

章を担当していることも象徴的である。そこで、「教育運動とは、権力の支持する教育理念とは異なる教育理念を、民間の、社会的な力が支持して、種々の手段でその実現をはかることである」と述べているように、“反権力性”をもって「教育運動」を定義する代表的論者でもあった[14]。

刊行発起人代表の遠山啓は、宗像とほぼ同じ1909年の生まれである。そして宗像と同様、家永裁判に関わってもいる。60年前後に、自らの執筆した教科書が検定で落とされ、修正した後通ったものの、教科書採択制度の変更によって発行不能になった経験が、遠山にはある。それに基づき、家永教科書裁判で証人として法廷に立つのは、ただし77年の第一次訴訟控訴審である[15]。したがって、宗像との関係は、日教組教研集会での講師としての接触によるところが大きかったものと思われる。しかし、宗像がより日教組の運動にコミットしていたのに比べて、遠山は、あくまでも「民間教育研究運動」にコミットしていた。というよりも、その牽引役であったというべきだろう。

東京府立第一中学校から福岡高校をへて、1929年、東大理学部数学科に入学するが、本人の回想によると「高校より程度の低い講義をする教授がいて、すっかりいや気」がさして、2年で退学。しばらくアルバイトをしながら哲学書や文学書を濫読しているが、きっかけがあって再び数学を志し、東北大学に入学しなおすことになる。44年、35歳で東京工業大の助教授となり、論文執筆の傍ら、戦後直後の講義で吉本隆明に強い印象を与えるなどしていた。そして、40歳のときに「代数関数の非アーベル的理論」で理学博士となった。ここまでは、多少の曲折もありつつ、いわば一数学者の研究人生であったが、50年代に入って方向転換が開始される。当時のある同僚は、「遠山さんの数学を見る眼が、獲物を狙う猛々しい眼から、冷静な見物人の眼に変化していった」と、当時の様子を描写している。50年代から遠山の活動の中心を占めるようになったのは、「数学の初等教育の改革」である[16]。

この転換の“動機”は、「自分の子どもの受けていた数学教育に疑問を感じ…関心を持つ」ようになったという説明もあるが[17]、戦後のいわゆる“逆コース”に対して教育内容の自主編成の必要性を看取したゆえという説もあり(大槻1982：29)、なんとも確定しがたい(そもそも“真の動機”は記述不能であるが)。ともあれ、遠山の他、小倉金之助、黒田孝郎ら6名の数学者とともに、51年12月に「数学教育協議会」(数教協)を作り、当時広く受け入れられていた「生活単元学習」批判を“戦闘的”に行った[18]。戦前の民間教育運動にも見られた「生

活教育」対「科学教育」の構図と相似的であるが、生活の具体的経験を重視し、もっぱらその地点に各教科の要素を盛り込んでいく学習形態に、数教協は強く異を唱えた。「断片的に個々の教材を漫然と取り上げ生活指導に利用していくという経験単元の方法」は、「いたずらに感覚的な世界に低迷」するものであり、将来的な生活改善の力にはなりはしない、と主張したのだった[19]。

そして、遠山らのいわば「科学主義」は、少なくとも民間教育運動内部では、圧倒的ともいえる支持を獲得した。各教科内容の研究を目的とする民間教育団体は20程度存在するが、数教協の設立された51年から59年までに、実に15団体が設立されている(大槻 1982：80-1)。また、50年代後半に遠山を中心に作り出された算数・数学教育の指導方法である「水道方式」は、文部省のカリキュラムとは、全く異なる体系を備えた学習理論（を完成させた）として、周囲に強いインパクトを与えた。当時、数教協のメンバーでもあった森毅は、「自分の口からは言いにくいが、数教協の影響を受けた民間教育運動団体はいくつもあるはずだ」と語っているが(森 1980：68)、他の教科研究者の立場から、遠山の水道方式を絶賛するのは、刊行発起人の一人、白井春男である。『ひと』創刊号の誌上座談会の場で、彼は以下のように述べている。

戦前からの民間教育運動が小学校教師を中心的な担い手として展開されてきたが、文部省に依存しないで、「具体的・計画的な教育の内容」を創り出すことは、「専門研究者との結合をしないかぎり、じだんだを踏んだところで、できない」。その課題を「初めておやりになったのが遠山さんのしごと」であると意味づけている。

> 「遠山さんのしごとがなければ、板倉さんの仮説実験授業のしごともできてこない。教育科学研究会・社会科部会は永久に生まれない、科学を教えるなんていうことは。科学というような原理・原則をまず教えていくという問題提起は、在来の教育運動を内部から変革して、現代の社会にふさわしい教育運動にねりなおす転機になったと、私は思うんです。」(『ひと』1973.2 p.45)

同じ場で、美術教師の久保島もまた、数教協の仕事に刺激されて「美術教育でも教科としての市民権を獲得しようとすることになった」と述べている。少なくとも当事者たちはそう意味づけていることからも伺えるが、「多くの民間教育運動団体の活動家が討論する機会が多かったが、そのなかで遠山さんは中心的な存在だった」と、森毅が述べていることも一定の妥当性をもつと考えられよう(森 1980：68)。この時期の活動を通して、遠山の周りに形成されたネットワークが『ひと』の創刊に結びついていくわけである。

他の創刊発起人についても触れておこう。先述の白井春男は、1926年生まれで、青山師範学校（現在の東京学芸大）を出たのち、戦時中ゆえに海軍に入ることになる。特攻隊員であったことは、同じく発起人の遠藤豊吉と同じであるが、戦後、教職員組合の運動に「自分の生き方を重ね」た結果、教職をパージされることになる(『ひと』79年2月号 白井「親子そろっておちこぼれ」より)。しかし、「『授業』を捨て」きれず、戦後復活した教育科学研究会の会員となり、社会科を専門に研究するようになった。その後、「人間の歴史の授業を創る会」、あるいは80年代初頭に新聞でも紹介された「社会科の授業を作る会」を主催し、各地の教師や「母親」とのネットワークを形成することになる。

日教組の運動とは一定の距離を保って、福島そして東京で小学校教師を続け、70年代以降は教育評論家としての知名度も高くなっていったのは、遠藤豊吉である[20]。おそらく、『ひと』の編集委員のなかで、80年代に入ってから一般にもっとも知られていたのは遠藤であろう。新聞での寄稿、連載などもさることながら、80年に教職を辞してからは、ラジオでの教育相談やテレビでの解説役などで著名な存在であった[21]。民間教育運動との関係でいえば、生活綴方運動について、70年代に新聞連載を執筆しているように、「日本作文の会」の主要メンバーであったことを指摘しておこう[22]。

1963年に“仮説実験授業”を提唱して、専門の会を組織し普及に努めた板倉聖宣も発起人である。1930年生まれで、58年に東大で物理学博士号を習得し、翌年、国立教育研究所に入所している。遠藤豊吉にもいえることだが、板倉にも関連の書籍が膨大にある。

年齢からいえば、発起人の中でもっとも高齢であったのは、1905年生まれの石田宇三郎であった。彼は、他の発起人が戦後に教育運動に関わることになったのとは異なり、戦前から教育労働者組合運動に深く関わっている。32年に検挙されたのち、30年代の戦前民間教育運動の一つの拠点ともいえる雑誌であった、『生活学校』の編集メンバーとなっている。戦後は、教科書の国定制度が廃止されると、創立さればかりの日教組とともに教科書編集協議会をつくり、その事務局長役になっている。その後は、日本書籍で社会科教科書の編集主任となり、80年になるまでその仕事を続けている(『ひと』83年3月号 pp. 90-1)。また同時に、51年に再興された教育科学研究会の社会科部会に所属し、やはり指導的な立場を担っている(大田・中内 1975：331-2)。

創刊当時、『ひと』の編集委員となっていた人物に戸塚廉がいる。静岡で52年

以降31年間、教育に関わる諸々の話題を取り上げた『おやこ聞』を発行しつづけていることで有名であったが、戦前、上述の『生活学校』の主宰者でもあった。それゆえ、石田宇三郎との繋がりはきわめて長いものであった[23]。『生活学校』は、35年から発行されるが、有力な協力者であった綴方運動の国分一太郎らが、38年に著作物の件で免職されると、読者が激減し、経営状況が著しく悪化した。さらに発行者の病気もあり、同年8月に廃刊されることになる。そして1940年、戸塚は石田ともに投獄され、42年7月まで獄中生活を送ることになった。保釈中に招集され、復員後は静岡・掛川で農民運動、教育運動に関わり続けることになるが、その戸塚を『ひと』の編集委員に呼び込んだのは、やはり石田であった。

ただ、戸塚によると、『ひと』の立ち上げに関わるまで、他の発起人たちとは会ったことがなかったようだ。初めての編集会議のおり、遠山の「軽井沢の山荘」で「おどろくべき早口で論じ立て」る他の編集委員たち（白井と板倉）を、「なんという優等生ぞろいだろう」と書いているように、多少の違和感も表明している[24]。他にも、立ち上げに関わった協力者がいるが、水道方式や仮説実験授業を実践する現役の教師たちなどである。

さて、ここまで記述してきたように、『ひと』の立ち上げと運営を支えてきたのは、戦前あるいは戦後の労働運動に深く関わった人物も含めつつ、遠山に象徴される戦後民間教育運動の中心的な人々である。彼らは当然、主要な執筆者でもあったわけであるが、以下では、むしろ『ひと』の常連執筆者で、後に著名となるような人々、あるいはその人々を介して浮上する集団を選択的に紹介していこう。

5.2. 次世代の代表的執筆者たち

まず、木幡寛を取り上げてみよう。彼とその周辺を記述することで、『ひと』が理念的・人脈的に深く関与した活動の一つの重要な流れを捉えることができよう。木幡は、80年代を通じて、授業実践記録を『ひと』に多数に載せているほか、編集部主催の研究集会についての報告もしばしば載せている。1949年生まれの彼は、当時、東京・武蔵野にあった明星学園の若手教師であった。58年に学習指導要領が法制化された後も、国定教科書を実質的には使用せず、教師自作の教科書を中心に授業を組み立てていた明星学園は、“自由主義教育”のシンボル的存在であった。『ひと』とその編集委員たちと関わりの深い教師が数名

いるが、授業研究を重視する、明星学園内部のいわゆる「教研派」の系統に属するタイプであったと考えられる。このリーダー格であったのが、小中学部校長で、後の「自由の森学園」の長となる遠藤豊であり、その補佐役とみられていた同部教頭の無着成恭であった[25]。

『山びこ学校』の生活経験主義を乗り越えるものとして、無着は、遠山の水道方式に感銘を受けており、60年代以降、自らの教育実践も「科学主義」のスタイルをとるようになっていた。また、教研派の活動により、反テスト・反序列主義を強力に押し進め、78年には小・中部で「テストの点数を廃止する」に至った。しかし、80年代に入って、高校部から、中学末年に内部進学テストを実施するべきという主張が強くなり、この勢力との間で内部対立が激しくなる。これには、教研派が長らく重視し実行してきた公開研究会（ときに全国から2000人近い教師がみにくる）の中止という問題も絡み、対立に拍車をかけたようである。この対立は70年代末にはかなり進行していたようで、この時期既に、無着らは遠山啓を明星学園長・高校部の校長へと担ぎ出し、小中高一貫した“自由主義教育”を明星内部で確立しようとした。これはやはり高校部の反対にあって実現しなかったが、別の学園を創るために、遠山と連れだって、土地探しを行ったという(佐野 1992：349-51)。79年に遠山が亡くなったものの、『ひと』は内部進学テストを導入した勢力への批判を誌上で展開するだけではなく[26]、遠藤豊が学園長となり、「自由の森学園」が85年に設立されるに至るまで、様々な支援をしたと編集部は後に述べている[27]。

木幡寛は、やはり『ひと』誌上でもよく名前の出る数学教師・松井幹夫などともに、自由の森学園へ移った。この時期、「校内暴力」から「管理主義」が争点として顕在的であっただけに、自由の森学園は好意的な注目を多大に集めた。が、設立後数年すると、決定的な運営上の問題につきあたる。木幡は、96年から98年まで、学園の校長を務めたのち、学園自体を辞職しており、99年以降は、新宿でフリースクールを開設している。ここに至る経緯を、彼は「元校長敗北の記／自由の森学園は暴力に支配された」と題する文章で説明してる[28]。要約すれば、開設2～3年後には、学園は授業その他が成り立たない“無秩序”な場と化し、少数者による秩序回復の試みもむなしく終わっているというものだ。

その理由として、設立当初から、「『反点数・反管理主義』という一種のスローガン」と「若者たちひとりひとりが…人間らしい人間として成長することを助ける」といった「理念的な文言」しかなく、「実際の学校運営上で必要とされる具体的な方法論はほとんど決まって」いなかったことを、木幡は指摘している。

喫煙・掃除・授業への関与はすべて“生徒の自由”にまかされ、収拾がつかなくなっている現状に対して一定のルールを導入しようとすれば、生徒・教師・父母から「管理主義」だと反対され、結局現状に戻ることの繰り返しであったという。このパターンは、暴力事件についての処置においても繰り返され、木幡はその徒労感から辞職することになるが、「私自身自省をこめて、『日本型の自由教育の敗北』だと総括しています」と述べている。そして、ある原則のもとに、他者と共存できる“自由な空間”を作り、授業を行っていくことを実践していきたいと締めくくっている。

木幡が、90年代に苦渋に満ちた道を歩んだとすれば、90年代に入ってますますその社会的被受容性を高めていった者もいる。70年代から80年代に至るまで、『ひと』の常連執筆者で、とりわけ注目すべきは、おそらく奥地圭子と鳥山敏子ではないだろうか。まず、奥地圭子について、その活動の経路を概観しておこう。1941年生まれで、63年には東京で小学校の教師となっていた奥地は、やはり『ひと』に多くの授業実践記録を載せている(29)。『ひと』との関わりは早く、73年9，10月号に、「おり紙の実践」と題する記録を二回に分けて掲載している。こうした実践記録の掲載は80年代前半にも数多くみられ、奥地が『ひと』あるいは民間教育運動に「熱心に取り組んできた」様子が伺われる(30)。

しかし、奥地圭子が、民間教育運動の熱心な活動の延長線上で、現在の「奥地圭子」になるのではない。78年頃から自身の子どもに生じた「登校拒否」の体験を通して、奥地はこの「問題」の“構築過程”を語る上で、欠かせない存在となっていく。きわめて大まかなまとめになってしまうが、「登校拒否・不登校」は60年代から80年代まで、基本的には、精神科で治療すべき現象、すなわち「病気」であった。したがって、原因は本人のパーソナリティー、あるいはそれを通じて“発見”される家族の様態に帰属されていく傾向が強かった。ところが、80年代末以降、「現在の学校」が有力な帰属先として語られ、「治療対象」から、“学校被害者”としての児童は、「援助の対象」となり、かつての「登校拒否」は「権利としての不登校」へと読み替えられるようになった(石川1999：38)。そして、92年には文部省がそれまでの見解から180度転換して、「登校拒否はどの子にもおきうること」と宣言する(31)。

こうした変化を、単純に一部の要因に起因すると考えるのは適切ではなかろうが、こうした社会的定義を変更する具体的な“異議申し立て活動”が展開されたこと、そしてその活動を担う組織的基盤が存在したことも、確実に重要な

要因の一つであることは間違いなかろう。実際、「登校拒否は病気じゃない」「学校に原因がある」という言説が、その顕在性を急激に上昇させたのは、すでに樋田[1997]も指摘している通り、1988年9月16日の朝日新聞夕刊の一面に、精神科医・稲村博らの見解として「不登校は早期治療しないと、20-30歳代まで尾を引く」という記事が大きく掲載されたことをきっかけとする。奥地がその中心にいる、各地の不登校児の親たちからなるネットワークが中心となって、朝日新聞に抗議するとともに二ヶ月後には緊急集会を開き、マスコミの注目を集めた。この争点の組織化は、少なくとも現時点から考えれば、きわめて戦略的に有効な選択であった。

ただし、ここでとくに注意しておきたいのは、奥地にシンボライズされるこの種の言説が、けっして奥地の体験そのものから発生したわけではないことである。奥地は、80年に、自分の子どもを連れて、国立国府台病院の精神科医・渡辺位を訪ねることになるが、ここで「希望会」に参加することになる。渡辺は自らの治療経験から、70年代には「学校原因説」を唱えていた数少ない専門家であった。彼が、親たちを対象に集団カウンセリングを行うようになったのは72年のことであるが、それが親によるより自立的な意見交換の場として認識・活用されるようになり、74年ぐらいから「希望会」として運営されるようになった。本稿の文脈で重要なのは、ここで奥地がある種の認知変換を遂げたことではなく、ある種の組織力と“情報発信”を可能とするネットワークを有した行為者が、そこに参加したということである。

『ひと』で初めて「登校拒否」が特集として取り上げられるのは、78年3月号でのことであった（「家庭崩壊・登校拒否・自殺」）。このときには、共同通信の斉藤茂男が「問題」の存在をルポにおいて示したり、教師や母親の体験談が載せられている。しかし、奥地が「希望会」に参加した80年には、その10月号で「登校拒否」が“単発”で特集になり、巻頭に渡辺位に対するインタビュー記事が掲載される。ここで、渡辺が自らの臨床経験から帰責についての認知を変えるに至る経緯や、学校の現状についての認識、そして親の「学校信仰」を解除すべきことなどが語られる。以後、『ひと』で登校拒否・不登校が特集となるときは、渡辺がしばしば登場することになる。しかし、『ひと』で渡辺や奥地が登校拒否について語る以上に、注視すべき出来事がある。「希望会」が10周年を記念して、親たちの体験談を本にして、『ひと』の太郎次郎社から出版したことである。

本を出版するという発想自体を、奥地が出したかどうかは確かめられていな

いが、太郎次郎社に出版の約束を取り付けたのは、間違いなく奥地である。そして、案が出たのが81年だが、出版されるまでには3年を有した。初稿では、編集部から「このままでは本にならない」といわれ、原稿を直す作業に時間がかかってしまったわけだ。しかし、この本『登校拒否―学校に行かないで生きる』の出版は、大きな反響を呼び、前述の抗議活動を行ったネットワークを形成する“発端始動”となった(32)。

まず、ネットワーク形成の直接の動機付けとなったは、「『希望会』に入れてほしい」という声が殺到したことであった。当然、希望会は一病院内の会であるから、誰もが入れるわけではない。そこで、病院に関係なく参加が可能な会の形成が求められた。この会の結成を呼びかける集会も用意できたこともあり、83年11月の出版から4ヶ月後に、120名の参加をえて第一回目の会合が開催される。これが「登校拒否を考える会」の出発となる。詳述は避けるが、この会の関係者が各地でさらに「親の会」を作ることになる。そしてついに、奥地は、経済的状況・社会的発言力の不安定化を考えれば、「清水の舞台からとびおりる気持ち」で、85年に教職を辞し、東京でフリースクール「東京シューレ」を開設することになる(『ひと』85年8月号 p. 72)。このとき掲載された、「いま、なぜ公立学校の教師をやめたか」という文章から、一部引用しておこう。

> 「登校拒否をその子のパーソナリティーの問題、母子関係の問題にすりかえず、学校状況との関係で見る人なら、本気で登校拒否にかかわれば、教師でいられなくなるのは当然なのかもしれない。…(登校拒否と向き合うことで)つきつけられた問題の第一は、教師が、いかに権力を持つ犯罪的な存在であるかということである。…各地の『教育を考える会』『ひと塾』などで、いまの教育はひどいという話はたくさんでるが、じゃ、もうそんな学校へ行かせるのはやめましょう、というはなしにはならない。…親や教師の精神構造の底には、巨大な学校信仰があるのではないか。…学校信仰を撃つこと、学校を相対化して低い位置にすること、学校に対して主体的につきあえる国民・市民を増やすことこそ急務ではないだろうか。」(『ひと』1985.8 pp. 71-77)

この後さらに、88年には、各地の「親の会」の交流を目的としたネットワーク作りに着手している(33)。90年にこのネットワークの第一回交流合宿が催されることになるが、この間に、上述した稲村記事掲載とそれへの抗議行動が生じるわけである。こうして辿ってくると明らかなように、不登校問題についてのある種の言説が普及していくその初期的条件において、奥地圭子と『ひと』との関係が、端的にはその関係において培われた人脈的資源がきわめて重要な役割を果たしていることが確認される。

もう一人、『ひと』の常連執筆者から、独自の活動領域と支持層を形成するに至る人物を取り上げなくてはならない。鳥山敏子である。1941年生まれで60年代後半から、東京で小学校の教員生活を始めている。80年中頃から、“いのち”を教える授業として、「にわとりを殺して食べる」「ブタ一頭、まるごと食べる」を、つまり鶏を殺して、あるいは殺された豚を教室で解体・料理することを実践して、注目を集めるようになる(34)。『ひと』でも、そうした授業についての実践記録が頻繁に掲載されているが、87年に読売新聞が主催した「地域社会と子どもの遊び」と題するシンポジウムに、著名な評論家や学者と共に、パネラーとして出席しているように、急速に活動の場を広げていった(読売新聞87.7.20)。

90年代になると全国で公演だけでなく、ワークショップを次々と開催するようになる。95年には教員生活をやめて、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の思想を実践する場として、長野県・美麻村に「賢治の学校」を設立したことは、新聞等でよく報じられたことであり、96年に出版された『賢治の学校』は、その時期ベストセラーとなっている。さらに97年に、東京・立川でやはり同趣旨のフリースクールを開設して現在に至っている。この鳥山敏子と『ひと』との関わりは深く、93年から二年間、『ひと』の編集代表を務めてもいる。就任時、「私の抱負」と題する文章では、以下のように述べている。

> 「2～30年前の教師たちは、…自分のことをあとまわしにしてとりくんだ。…ここに落とし穴があった。…教師や大人は、自分の生身のからだの感覚を鈍くし、理念を先行させていたのだった。…『ひと』再出発の編集代表としてとりくみたいこと。ひとりひとりが自分で立ち、自分の感覚に敏感になり、このからだの声を聞きながら、自分をごまかさずに生きることから見えてくることをやっていきたい。これなくして、子どもと向きあえる大人にはとてもなれないのだから。」(『ひと』 1993.3 pp.1-2)

執筆者として登場するのは、75年3月号であった。「授業と生活のはざまで」と題されているように、共働きで子供を育てながら、いかにして自分の時間(「授業づくり」のための)を確保するか、その悪戦苦闘ぶり(たとえば夫君との時間の「争奪戦」)が文章の主要な構成要素となっている。それが掲載されているのは、前年、彼女が編集部・委員の主催する授業研究合宿(「全国ひと塾」)に参加して、感激し、「授業づくり」に全精力を傾けるに至る過程が描かれているからでもあろう。

「自分の授業の力不足を、子どもの努力と自覚の不足に責任を転嫁しようと

することに耐えられなってきた」鳥山は、その当時を「息の詰まるような日々のころ」と表現しているが、その悩みの解決の糸口をみつけようと研究会に参加する。そして、講師たちが行う授業を受けた体験を以下のように語っている。

「授業とはこんなに楽しいものだったのだ。いや、楽しくすることができるのだ。…学習とは、からだや頭の遊びだったんだ。遊びをとおして、はじめて、からだで感じ、からだからでてきたことばで考えることができるのだ。」

既に、鳥山の以降の活動や文章において、一貫してキーワードであり続ける、“からだ”という言葉がここで使われている。この点に注意しておきたい。鳥山は、もともと「日本作文の会」に所属し、綴方教育にそれまで8年間取り組んでいた[35]。そこに一定の限界を感じての「ひと塾」への参加だったわけであるが、この参加でのある出会いが、徐々にしかし短期間に彼女を一種独特の語り口をもった実践家へと変貌させていく。当初は、上で引用した文章の中でも語っているように、「ものを作る授業」を実践していた。それは、刊行発起人の一人、白井春男が「社会科の授業を創る会」で考案してきた授業法で、たとえば実際に機織りをとおして産業革命を考えるといったことなどに象徴されるものである。この授業実践に熱中している自分の姿を描いたのが75年3月号の文章であった。しかし、彼女の今日に至る変貌あるいはその指向性は、「ひと塾」内の別の出会いによって促されていく。

演出家の竹内敏晴との出会いである。1925年生まれの竹内は、50年代後半から演出家として活動していたが、60年前半から「近代的なリアリズムの演劇、とくに演技」を超えようと模索する。その過程で、野口体操の野口三千三との接触などを経て、72年に竹内演劇教室（のち研究所）を開設し、「レッスン」を行うようになる。その内容を、適切に表現することは、少なくとも著者にとっては、きわめて困難である。一種の即興劇あるは身体動作・発声を通じて、“からだを解放する”こと、あるいは“からだに気づく”ことが目指される。そのことがすなわち、人間における“なにものか”を回復すること（治癒）になる。レッスンとは、その状態を目指すことであると、ひとまず述べておきたい[36]。

そして、こうした活動を通じて、あるきっかけから、72年12月号に『ひと』に文章を載せることになり、『ひと』との関係が生じ、「全国ひと塾」などに講師として呼ばれるようになったようだ。

さて、鳥山であるが、74年から76年ぐらいの間は、やはり「ひと塾」で出会った、つるまきちかこの「『からだ』と『ことば』の会」で、竹内のレッスンを受けていた。しかし、主催者が竹内を講師として呼ばなくなった[37]。そこで、77

年に、10人ばかりの友人とともに「こんとんの会」を作って、竹内のレッスンをさらに受けるようになる。この当時の状況について、鳥山は以下のように語っている。

「わたしは自分の（授業）実践はもとより、職場での人間関係、夫婦の関係に完全にゆきづまっていた。…『こんとんの会』をつくり、竹内敏晴のレッスンを受け、自分に出会う旅を始めたのだった。そのころのわたしには、レッスンと『こんとんの会』の仲間の支えが自分を支えるすべてであった。それは生と死を賭けた場であった。わたしのなかで無意識に抑圧し、自分で自分を受け入れなくしている自分に気づき、解きはなっていくレッスン。その場では、いっさいのごまかしなく自分をさらけだし、素裸の自分にそのまま対峙する。」（『ひと』90•10号：113）

演劇研究所の「地下のレッスン室で、座布団やクッションをたたきまくって怒りを出し」ていたという話も見られるが（『ひと』94年7月号 p. 101）、もう一つの出会いにも触れておきたい。鳥山は、やはり竹内が中心になって作っていた「からだ77」という集団とも行動をともにするようになっていた[38]。このとき、「77」のメンバーであった社会学者・見田宗介（真木悠介）と会うことになる。見田と組になって行った「間身体のレッスン」は、鳥山にとって決定的な出来事であったと、90年代になって行った見田との対談で述べている。それは、「風っていうか、気体の状態に完全になってた」状態、あるいはその翌朝、「自分の血が流れる音が聞こえる」状態と表現されている[39]。90年代初頭に、『ひと』の編集体制を一新する動きが生じたとき、編集代表の役をはじめに依頼された見田は、「学校現場に通じていない自分としては、ぜひ、鳥山敏子さんを編集代表として推したい」と提案して（『ひと』93年3月号 pp. 101-3）、自らは「サポート委員」となる。この両者の関係は、今述べたような出発点を有していた。

鳥山は、学校での孤立や友人の子どもの自殺などから生じた激しいストレスから、80年以降も竹内演劇研究所に通っていたという。しかし、ここでは、以下のことを確認して鳥山についての記述を終えたい。竹内敏晴のレッスンから得られた体験を通して、あるいはそれを基盤にして、鳥山は“からだ”“いのち”“癒し”といったキーワードで、その意図するところが表現される、独特の授業実践を生み出し、ワークショップを主宰し、そうした活動を取り入れた“学校”を開設するに至った。そして、その一連の流れにおいて、やはり『ひと』運動との関わりが重要な始点の役割を果たしている。また同時に、『ひと』はそうした活動を文章として表現する、鳥山にとっての主要な場を提供してきた。

5.3. '90年代における回帰現象とその後

80年代そして90年代と、『ひと』の執筆者の中で、一般的に見ても著名な"教育言説生産者"は数多く見られる。たとえば、80年代まで、数学者の森毅は多くの文章を載せいているし、95年以降、編集代表となった教育学者の佐藤学などはその最たる人物であろう。しかし、『ひと』の有してきたであろう、言説空間内部での機能を捉えようとする本稿の目的から見て、まさにその執筆者にとってもつ、『ひと』およびそこで形成されてきたネットワークの意味の重さという観点から、とりわけ奥地圭子、そして鳥山敏子を多少とも詳しく記述しておくことは、妥当な選択であったと考えられよう。

最後に、鳥山が編集代表の任期を終えた95年以降のことについて言及しておきたい。この時期、編集委員会や編集部の名で出された文章に明確であるが、『ひと』はいわば"より狭義"の学校・教育問題へ、回帰していく。

「(鳥山時代には) 親子関係と子育て…若者の自立とセクシャリティーや女性の生き方、水と環境汚染の問題など、教育の枠を大きく広げたテーマに取り組んできました。」(『ひと』95.2 p.13)

「その一方、『ひと』が学校問題から遠ざかったこととは裏ハラに、…(文部省の教育改革によって) 現場はめまぐるしい変化をみせています。…編集委員会も編集部も、実は今こそ、教育問題へのストレートな切り込みが、多くの読者から待たれているのではないかと…。…第三期の『ひと』は、教育改革の模索、"学び"の伝達と創造の場=『授業』の鍛えなおしのために、いま、何かをなそうとしています。」(『ひと』1994.11 p.95)

『ひと』にその早い時期から深く関与していた奥地圭子、鳥山敏子、あるいは木幡寛が、それぞれの理由から、学校の教師を辞して、異なる場での"実践"を指向していく経過を、簡略ではあるが既に記述してきた。したがって、この編集方針の転換・回帰は、彼らが『ひと』運動を、ある時期それぞれの重要な思考上のあるいは行動上の基盤としながら、現時点で見る限り、そこから分かれ出ていったことを、さらに印象づける。そして、冒頭部で示したように、『ひと』は自らが企図する方向で支持基盤を形成できなかったという認識から、98年に一旦休刊する。その後一年間、次なる展開を図るために、『ひとネットワーク』という小冊子を隔月で発行し、一部読者とのコンタクト・意見交換を維持しつつ、99年秋には復刊を果たしている。しかし、一年後、2000年7・8月号を出したところで、今度は発行部数の低迷(三千部強)によるところも大きく、

再度休刊することになった(『リニューアル ひと』2000年7・8月号「休刊のお知らせ」より)。

次節以降では、70年代から80年代にかけて、『ひと』運動の支持基盤として存在した、読者ネットワークとその生成パターンについて検討することで、ある種の教育言説を生産可能とし、さらに普及させた具体的な過程とその諸条件について、一定の知見を獲得したい[40]。

註

(1) d'Anjouは、まず一般変動モデルに抗議行動を位置づけ、次いで文化変動モデルに組み替えていく作業をしているが、あくまでも自己の事例に適合的なモデル形成が目指されているといえよう(d'Anjou 1996：39-67)。

(2) あまり明示的ではないが、d'Anjouが、公共アリーナ(public arena)の議論を展開したHilgertner＝Bosk[1988]に言及していることからも、この点は伺える(d'Anjou 1996：48)。

(3) この影響関係には、あまり顕在的でない「普及」と「特定行為」との二経路があるとだけ述べられているが、判然としない(d'Anjou 1996：48)。

(4) 例えば、Olive[1989]は、「群衆」あるいは「拡散的集合性」(diffuse collectivities)は社会運動の重要な要素なのであり、運動の組織的要素と非組織的要素との統合を訴えている。

(5) 60年代後半以降の教育運動の状況を整理したものとして、まず広瀬[1989]が挙げられる。彼は、60年代後半以降に生じた、地域を単位に父母を主として構成される教育運動を「新しい教育運動」として、日教組の運動、あるいは民間教育研究運動とは異なることを強調する。ただし、慎重に、実際にはかなり多様な構成員からなり、その中には教組系の人物が含まれることもあると指摘してはいる。また、民間教育運動との運動と関わりのあるものについては触れていない。

(6) たとえば、戦後の朝日新聞を詳細に検討して、その変化を記述したものとして阿部[1992]が挙げられる。また、広田[1998]も、他の資料も含めながら、同様の指摘を行っている。

(7) これは滝川[1994,96]である。彼の議論はもともと不登校児の数が、75年頃を境に下降から上昇に転じてきた現象を説明しようためのものであるが、それを本文中の理由によって、学校の威信が低下してきたことにもとめている。

(8) 阿部[1992]も広田[1998]も、『いま学校で』に言及しているが、評価は異なる。どちらも学校批判化のシンボル的存在としている点では同じである。しかし、阿部は、この連載に学校への社会的眼差しを変化させた決定的な役割を見るのに対して、広田は、あくまでも「教育する家族」の一般化という土壌があって、この連載が多大な反響を呼んだと考える。

(9) 佐田智子 1980「序列主義とのたたかい」、『遠山 啓 その人と仕事』(太郎次郎社) 所収。

(10) 『ひと』73年2月号「ひとを教えることの発見：わたしたちの出発点をさぐる」、および74年1月号「たのしい学校をめざして：『ひと』これまでとこれから」。

(11) この「Q町ひとの会」のネットワークとゴルフ場反対運動の関係については、拙稿[1998]参照。

(12) 小尾芳枝 1980「わたしにとっての『親鸞』」、『遠山 啓：その人と仕事』所収。

(13) 自著の中で、謹厳なる中学校長の末子として生まれたと述懐しているが、父親の性格を論ずるにあたって、宗像は兄弟の名前を挙げている。礼、道、操、信(すべて姉)、そして本人が誠也であり、「まるで五倫五常の徳目列挙」であると評している(『私の教育宣言』1958 岩波書店 pp. 172-9)。

(14) 広瀬が、78年出版の教育学事典における宗像定義の踏襲などの例を挙げて、かなりの期間、支配的定義であったことを示している(広瀬 1989：182-3)。

(15) 家永三郎 1980「家永教科書裁判と遠山啓」『遠山 啓：その人と仕事』所収。

(16) 吉本隆明 1980「遠山啓のこと」、斉藤利弥 1980「30年前」『遠山 啓：その人と仕事』所収。

(17) 『遠山 啓：その人と仕事』1980 p. 297

(18) 森毅 1980「教育運動のなかで」『遠山 啓：その人と仕事』所収。

(19) 数学教育協議会の「趣意書」(51年作成)より (大槻 1982：83-4を参照)。

(20) 遠藤豊吉が、朝日新聞(70.6.2)に「日教組はどうあるべきか」という文章を載せている。組織の官僚性的論理が支配的であり、“教育の本義”に基づいて行動すべきと批判している。

(21) 読売新聞で81-2年にPTAについての連載などもしている。また、83年には、NHKが行った、いじめ取材の代表役も務めている。

(22) 朝日新聞(73年3月)、「思想を歩く」シリーズ中4回分を担当。

(23) 石田宇三郎の著作集が出版されたとき、『ひと』83年3月号で、戸塚は「『ルソーを継承するもの』をめぐって 石田宇三郎君と私」という文章を書いている。石田との初めての出会いが1933年であったこと、戦前の教育運動のことなどが記されている。石田の戦前の情報についてはこの文章も参照した。

(24) 戸塚 廉 1980「『ひと』創刊に参加して」『遠山 啓：その人と仕事』所収。

(25) 『山びこ学校』のベストセラー化と、それによる“スター化”によって、無着が山形から東京にでてこざるをえなくなり、さらに明星学園に職を得るようになった経緯については、佐野[1992]に詳しい。

(26) 『ひと』83年3月・9月号「なぜ、明星学園をやめたか」で、遠藤豊、無着成恭、松井幹夫、遠藤豊吉が座談会を行っている。ここで、内部進学テストあるいは公開研究会について

の内部事情が、彼らの立場から述べられている。

(27) 92年12月号は、編集体制一新の前の、いわば総括号であり、その総括として「自由の森学園」の混乱を扱っている。その冒頭にも、「『ひと』編集委員ならびに『ひと』誌は、その設立に大きな助力を尽くした。」と述べられている。そして、「第三者の立場でその教育を論じるのではなく」、その「当事者」である生徒（あるいはかつての生徒）や親の批判的・告発的文章を主としたという。しかし、『ひと』も提唱してきた“自由主義的教育理念”そのものに内在するリスクの問題として、編集に携わった者たち自身による議論がなされたわけではない。

(28) 『文藝春秋』1999年8月号 pp. 276-84。

(29) また、「教室寸描」と題するコラムを81年には一年間連載している。

(30) 朝日新聞(84.4.9)。連載「登校拒否の内側」の中で、インタビューに答えて。

(31) 1992年9月24日付の通知「登校拒否問題への対応について」。

(32) こうした本出版の経緯と反響、そしてネットワーク形成の過程については、登校拒否を考える会編『学校に行かない子どもたち』1987（教育史料出版会）に収められている、奥地の文章「我が子の登校拒否が私を変えた」を参照している。

(33) この部分については、登校拒否を考える各地の会ネットワーク編 1992『不登校を生きる』の奥地による序文を参照。また、この当時の奥地の影響力については、自ら関西のある「親の会」に関わっている山田が、以下のように述べているところからも推察されよう。奥地の89年に出版された『登校拒否は病気じゃない』（教育史料出版会）が、「各地の『親の会』でそれこそむさぼるように読まれた」（山田 1998：202)。

(34) この授業については、『いのちに触れる：生と性と死の授業』（太郎次郎社）1985にまとめられている。

(35) 鳥山の活動経歴については、主に、真木悠介・鳥山敏子 1993『創られながら創ること』（太郎次郎社）を参照した。

(36) 活動経緯やレッスンについては、竹内敏晴 1980『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社）を参照。

(37) この事情については、鳥山が、次のように説明している。「竹内さんのレッスンを受けて変わっていく、私みたいなのが出はじめたもんで、竹内さんのレッスンに対するある危機感というのが生まれてきたんだよね、つるまきさんのなかに」（真木＝鳥山 1993：6)。

(38) 「1970年代の終わりにわたしたちは、竹内敏晴氏のドラマトゥルギーと、ヨガや野口晴哉氏や野口三千三氏の身体技法／身体思想を軸として、ある烈しい集団を形成していた。」と真木＝鳥山 1993の「あとがき」で述べられている。

(39) 当時、狛江から青梅まで鳥山が走って帰ったエピソードなどが語られているが、ある種濃

密な空間と時間があった、という以上の理解しか、私にはしえない。

(40) 読者ネットワークの活動件数には、グラフ1でみるように、かなりの増減がある。この点を、『ひと』の言説特性と教育言説における環境的状況との関係性という視点から説明を既に試みた（拙稿「ある教育運動の盛衰：共鳴性分析を適用して」『社会運動と文化』ミネルヴァ書房より2000年春刊行予定)。そこで、次節以降では、とくに80年代に形成されたネットワークに活動モデルを提供したと考えられる、70年代の各地のネットワークを生成可能にした、地域社会的な条件にとくに注意を向けることとする。

参考文献

阿部耕也 1992「高等学校をみる社会的視線の変容」門脇厚司・飯田浩之編『高等学校の社会史』東信堂，215-236

Blumer, Herbert. 1939 "Collective Behavior." Pp. 219-80 in An Outline of the Principles of Sociology, edited by Robert E. Park. New York : Barnes and Noble.

d'Anjou, Leo. 1996 "Social Movements and Cultural Change : The First Abolition Campaign Revisited" Aldine de Gruyter

Gusfield, Joseph R. 1981 "Social Movements and Change." Pp. 317-39 in Research in Social Movements Conflict and Change volume 4, edited by L. Kriesberg. Greenwich, CT : JAI

樋田大二郎 1997「不登校を克服することで一段と成長する」『教育言説をどう読むか』新曜社，185-206

広瀬隆雄「変容する教育運動を探る」岡村達雄編 1989『教育運動の思想と課題』社会評論社，179-219

広田照幸 1998「学校像の変容と〈教育問題〉」佐伯ほか編『学校像の模索』岩波書店，147-169

広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社

石川瞭子 1999『不登校と父親の役割』青弓社

荻野達史 1998「離脱と浸透」『年報社会学論集』第11号，119-30

Oliver, Pamela E. 1989 "Bringing the Crowd Back IN : The Nonorganizational Elements of Social Movements" Pp. 1-30 in Research in Social Movements, Conflict and Change 11, edited by L. Kriesberg. Greenwich, CT : JAI

佐野眞一 1992『遠い「山びこ」：無着成恭と教え子たちの 40 年』文藝春秋
滝川一廣 1993『家庭のなかの子ども 学校のなかの子ども』岩波書店
滝川一廣 1996『脱学校の子どもたち』井上俊他編『こどもと教育の社会学』岩波書店，39-56
山田　潤 1998「学校に『行かない』子どもたち」『岩波講座 現代の教育 4 いじめと不登校』岩波書店，186-208